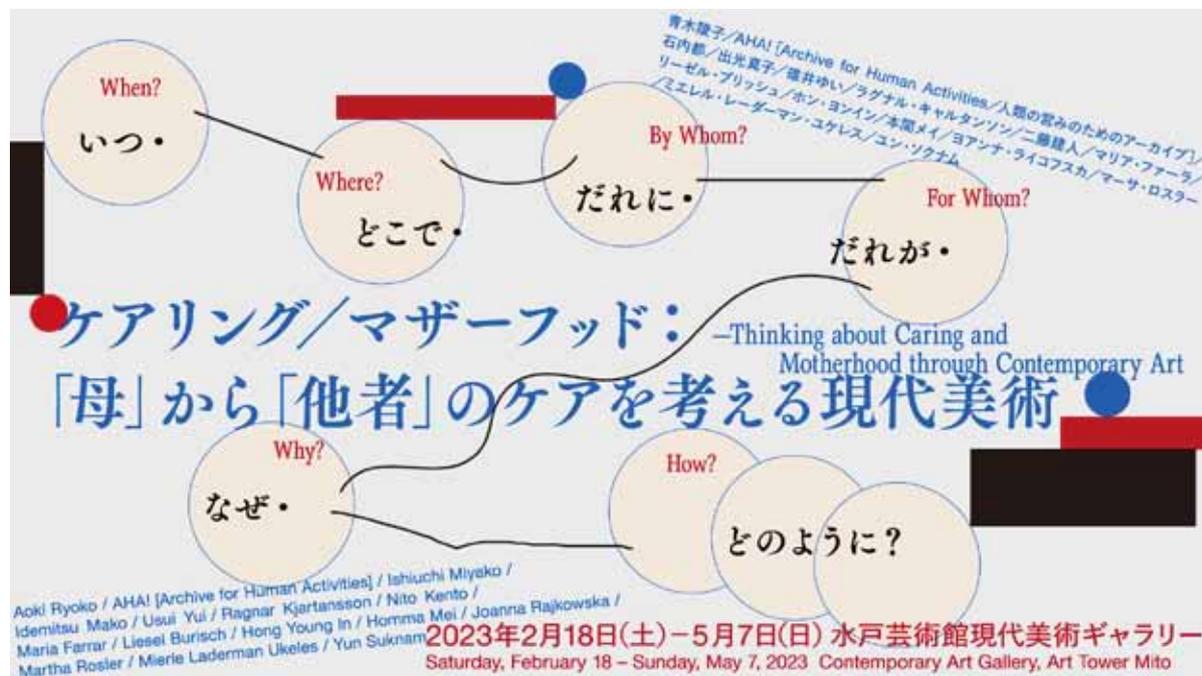


ケアリング／マザーフード：「母」から「他者」のケアを考える現代美術 —いつ・どこで・だれに・だれが・なぜ・どのように？—



【展覧会概要】

展覧会名：ケアリング／マザーフード：「母」から「他者」のケアを考える現代美術
—いつ・どこで・だれに・だれが・なぜ・どのように？—

会 期：2023年2月18日(土)～5月7日(日)

開場時間：10:00～18:00 (入場は17:30まで)

会 場：水戸芸術館現代美術ギャラリー

出品作家：青木陵子、AHA! [Archive for Human Activities / 人類の営みのためのアーカイブ]、石内都、出光真子、碓井ゆい、ラグナル・キヤルタンソン、二藤建人、マリア・ファアラ、リーゼル・ブリッシュ、ホン・ヨンイン、本間メイ、ヨアンナ・ライコフスカ、マーサ・ロスラー、ミエレル・レーダーマン・ユケレス、ユン・ソクナム

休 館 日：月曜日

入 場 料：一般900円、団体(20名以上)700円

高校生以下／70歳以上、障害者手帳などをお持ちの方と付き添いの方1名は無料

※学生証、年齢のわかる身分証明書が必要です

◎年間有効フリーパス → 「年間パス」2,000円

◎学生とシニアのための特別割引デー「First Friday」

→ 学生証をお持ちの方と65歳～69歳の方は、毎月第一金曜日(3月3日、4月7日、5月5日)100円

主 催：公益財団法人水戸市芸術振興財団

助 成：公益財団法人花王芸術・科学財団、公益財団法人野村財団、大和日英基金、Danish Arts Foundation

後 援：ブリティッシュ・カウンシル、デンマーク王国大使館、駐日韓国大使館 韓国文化院

協 力：サントリーホールディングス株式会社

企 画：後藤桜子(水戸芸術館現代美術センター学芸員)

いつ・どこで・だれに・だれが・なぜ・どのように？——現代美術作家15名・組の作品を手掛かりに、展示やさまざまな関連プログラムをとおして、ケアを「ひとり」から「つながり」へとひらく展覧会を開催します。

ひとは誰もが、日々の生活のなかで、あるいは人生のさまざまな場面でケアを受け取り、またケアをする機会を経験します。哲学者エヴァ・フェダー・キテイが「どんな文化も、依存の要求に逆らっては一世代以上存続することはできない」と述べるように、自分以外に関心に向け、気を配り、世話をし、維持し、あるいは修復するといったケアにかかわる活動は人間社会を支える根源的な実践といえるでしょう。しかし、生産性や合理性を追求する近代社会の形成においてケアの役割とその担い手の存在は長く周縁化され、他者化されてきました。ケアにかかわる活動は、誰もが必要とするからこそ、あたかも「誰か」の本質的な仕事のように自然化され、不可視化され、あるいは自己責任化されています。その「誰か」とはどのような「人間」であり、どのような「つながり」のなかにあるのか——本展覧会は15名・組による現代美術作品を手掛かりに、展示や関連プログラムをとおして、ケアを「ひとり」から「つながり」へとひらくことを試みます。

会期中は作品・活動について掘り下げるトークイベントや、ひとりでも、誰かと一緒でも展覧会を楽しめるプログラムを多数実施。また、同時期には展覧会と連動したワークショップや部活動を行う「高校生ウィーク」も3年ぶりに開催します。

【出品作家】（日本語五十音順）

青木陵子（1973年兵庫県生まれ、京都府を拠点に活動）

AHA! [Archive for Human Activities / 人類の営みのためのアーカイブ]（2005年から活動）

石内都（1947年群馬県生まれ、同県と東京都を拠点に活動）

出光真子（1940年東京都生まれ、同都を拠点に活動）

碓井ゆい（1980年東京都生まれ、埼玉県を拠点に活動）

ラグナル・キャルトンソン（1976年アイスランド生まれ、同国を拠点に活動）

二藤建人（1986年埼玉県生まれ、同県を拠点に活動）

マリア・ファーラ（1988年フィリピン生まれ、英国を拠点に活動）

リーゼル・ブリッシュ（1987年デンマーク生まれ、同国とドイツを拠点に活動）

ホン・ヨンイン（1972年韓国生まれ、英国を拠点に活動）

本間メイ（1985年東京都生まれ、同都とインドネシアを拠点に活動）

ヨアンナ・ライコフスカ（1968年ポーランド生まれ、同国と英国を拠点に活動）

マーサ・ロスラー（1943年米国生まれ、同国を拠点に活動）

ミエレル・レーダーマン・ユケレス（1939年米国生まれ、同国を拠点に活動）

ユン・ソクナム（1939年旧満州国 [現中華人民共和国] 生まれ、韓国を拠点に活動）

【企画趣旨+出品作家例】

15名・組のアーティストの作品を手掛かりに——1960-70年代第2波フェミニズムを背景に生まれた表現から育児日記の再読をとおして辿る「私（わたくし）の記録」まで
社会とケア、そしてケアとその担い手の関係をほぐし、編み直すことを試みる本展覧会は、同時代を生きるアーティストたちの作品を手掛かりに、大きな主語や物語によって見過ごされてしまうもの、自然化され当然視されてきたものを問い直すとともに、ケアの倫理が提示する、特定の状況や他者とのつながりにおける「自己と他者の境界の曖昧さ」やその過程で生まれる「葛藤」、あるいは自己の変化といった人間の心の機微をとらえた豊かな表現を紹介します。

▶出品作家（一部）

- 1960年代から70年代の第2波フェミニズムの動きに共鳴し、「ケア」に関わる行為を家庭内へ抑圧することに異議を唱えたマーサ・ロスラーやミエレル・レーダーマン・ユケレスら初期作品。※ユケレスの出品作品はエキシビジョン・コピーを展示予定。
- 「重力」や「愛」などかたちのないものに注目し、それらの可視化を試みる二藤建人。
- 歴史や政治の中心的存在として語られることのなかった家庭や工場で働く無償または低賃金の労働者に眼を向け、葛藤を抱えながらも互いに意思疎通を図ることで分断を乗り越えようとするホン・ヨンイン。
- 本間メイは「女性特有の痛みはなぜなくなるのか？」という問いをきっかけに妊娠・出産をする身体と社会や習慣によって植えつけられる痛みの関係を考察する。
- 時、そして記憶をまとうものとしての「布」をとらえてきた写真家・石内都が、「同性の人間の一人として客観的な距離をもって」亡き母と向き合うためその遺品にカメラを向けた《mother's》と、子どもの着物に縫い込められた生への祝福や人々の願いをとらえた《幼き衣へ》。
- マリア・ファアラは、異郷で「目に見えない静かな存在」として社会を支えながら、新たな「つながり」のなかに生きる移民労働者の意志と誇りを、洋の東西を織り交ぜた多彩なスタイルと鮮やかな色彩で描く。
- 一貫して「私（わたくし）の記録」に注目してきたAHA!。私的な動機に支えられてきた個人の記録に注目するなかで出会った「かおりさん」による「育児日記」の再読をとおして、大きな主語では括り切れないひとりの人間の記録とそれにまつわる記憶へと語り直す「わたしは思い出す」を巡回展示。会期中も読書会など継続的に活動する。



マーサ・ロスラー
《キッチンの記号論》1975年
Courtesy of Martha Rosler and
Electronic Arts Intermix(EAI),
New York



二藤建人《誰かの重さを踏みしめる》
2016-2021年 Courtesy of LEESAYA



ホン・ヨンイン
《アンスプリッティング》2019年



本間メイ
《Bodies in Overlooked Pain
(見過ごされた痛みにある体)》2020年



マリア・ファアラ《鳥にえさをやる女》
2021年、個人蔵
Courtesy of Ota Fine Arts



AHA! [Archives for Human Activities
／ 人類の営みのためのアーカイブ]
《わたしは思い出す》2021年
デザイン・クリエイティブセンター神戸
(KIITO) での展示風景、2022年

「美術館」を、ケアする人・ケアされる人にとっても訪れやすい場所へ
公的領域とケアのつながりを強めることを目指す本展では、さまざまな展覧会関連プログラムを通して、ケアする人にもケアされる人にも訪れやすい場を作ります。
詳細は次ページ以降の「関連プログラム」ならびに「展覧会に行ってみよう！」をご参照ください。

▶会期中のプログラム（一部）

- ケアをする人・ケアを受ける人とともに・・・「ケアする人」を考えるメッセージ&ハーブの香りのお土産、赤ちゃんと一緒に美術館散歩ほか
- 誰もがケアの当事者となる社会を描く・・・高校生ウィーク2022

【展覧会タイトルについて】

いつ・どこで・だれに・だれが・なぜ・どうやって？——つながりにもとづく社会基盤としての「ケア」を、アートをとおして考える

人間社会において「誰もが相互に依存しながら生きている」という認識に根ざす本展では、同時代を生きるアーティストたちの作品を手掛かりに、「ケアリング」と「マザーフード」というふたつの言葉の間に区切りを入れ、これらの言葉を解きほぐすことから、社会におけるケアを「ひとり」から「つながり」へとひらくことを試みます。

「care」の現在進行形「ケアリング (caring)」とは、「ケアをする行為」を指す言葉です。政治学者のジョアン・C・トロントは、民主主義におけるケアの概念について、人間はみな脆弱な存在であるからこそ、ケアを受け取り、ケアをするという関係性の中で生きるケアを中心に据えた世界が必要であると説いています。他方、スラッシュ記号の後に続く「マザーフード」とは「母親 (mother)」に「その状態にある (state of being)」ことを示す接尾語「-hood」がついた、「母親である期間や状態」を意味する言葉です。長く本質的な結びつきを強調されてきたこれらの言葉にとって、「ケアリング」と「マザーフード」を並置することは、互いを限定的な意味に留める危険をはらんでいます。ケアは母子関係や家庭内労働に限定されない行為として誰もが当事者であることは言わずもがな、実態を顧みれば、ケア労働の担い手として多くの割合を占めるのは今なお女性です。また、家父長的な社会構造においても、女性の経済的自立を促す社会政策においても、領域の公私に関わらず、ケアの労働とその担い手は容易にその価値を見過ごされ周縁化・他者化されてきました。哲学者エヴァ・フェダー・キテイの「私たちは—みんな等しく—お母さんの子供である」という言葉を借りれば、ケアを担う人もまた人の子であり、ひとりの人間として捉え直される必要があるのではないのでしょうか。これらの思想的・社会的議論を踏まえ、本展では本質主義的な幻想に基づくケアの担い手としての母親像を示すのではなく、ひとりの人間として「母親」や「ケアを担う人」に向き合う豊かな表現を提示するとともに、「具体的な状況のなかで発せられた他者からの声に応答する」*ケアの責任を負う状態に置かれたとき、その個別具体性を受容する社会をどのように指向することができるのかについて共に考え実践することを試みます。これらが「『母』から『他者』を考える」という本展のタイトルの示すところでは。

また、本展では、「いつ・どこで・だれに・だれが・なぜ・どのように」といういささか冗長な問いかけを行います。この問いかけは、誰もがさまざまな場面でケアと関わっている、というケアの多元性を意識づけるものです。今現在誰かをケアすることも、誰かにケアされることも縁遠く感じているという人がいれば、ぜひ今立っている場所からこの言葉を手掛かりに考えてみて欲しい、というメッセージでもあるのです。

【関連プログラム】

・1月31日（火）申込受付開始。特に記載がない限り参加費無料、中学生以上対象。プログラムの参加には展覧会入場券*が必要です。参加方法等詳細は当館ウェブサイトをご覧ください。※高校生以下・70歳以上、障害者手帳をお持ちの方は無料。但し、別途参加費がかかる場合がございます。

- ・託児付のプログラム以外も子ども同伴参加歓迎。
- ・感染症対策をとって実施します。

■ アーティストトーク（託児付）

日時：①2月18日（土）（日英通訳付き）、②4月22日（土）各回14:00～15:30

講師：①マリア・ファーラ、リーゼル・ブリッシュ、本間メイ

②松本 篤（AHA! [Archive for Human Activities/人類の営みのためのアーカイブ]）

定員：各回40名（要申込、先着順）

会場：会議場

■ 『わたしは思い出す』読書会

本展参加作品を再構成した書籍『わたしは思い出す』（AHA!）を題材とした読書会を実施します。2010年6月11日から育児日記を綴り始めたかおりさん（仮名）は、その再読によって何を思い出したのか。「わたしは思い出す」から始まる短文を手掛かりに、印象に残ったかおりさんのエピソードや、参加者自身が思い起こした出来事について語り合います。事前に書籍を読んでご参加ください。

日時：3月11日（土）、12日（日）、4月23日（日）各日14:00～15:30

進行：AHA! [Archive for Human Activities/人類の営みのためのアーカイブ]

定員：各回10名（要申込、先着順）

会場：現代美術ギャラリー ワークショップ室

■ 「子育てアーティストの声をきく」

いつ・どこで・だれに・だれが・なぜ・どのように？——たとえば、子育てをしながら作品制作をおこなうアーティストたちは、どのようにケアと作家活動を行っているのでしょうか？誰かをケアしながら作家活動を続けていく過程では、いつ・なぜ・どんなことが「壁」や「変化」につながるのか。彼女ら・彼らが直面する問題は、「子育て」や「アーティスト」に固有のものなのか。

本展では、子育てするアーティストの実体験や広く「ケアする人・ケアされる人を排除しない」ためのアイデアを共有する掲示板を開設・運営します。ぜひあなたの「声」を寄せてください。

会期中には、寄せられた「声」を振り返るプログラムも開催します。

●「子育てアーティストの声をきく」（坂本夏海、滝朝子、長倉友紀子、本間メイ）は、アーティストとの協働において文化施設に求められる配慮を提唱したガイドライン「How not to Exclude Artist Parents(子育てするアーティストを排除しないために)」*の日本語翻訳からスタートし、芸術生産を取りまく日本国内の実態・環境に照らしながら、子育てと制作にまつわる経験や課題を共有していこうとする活動です。

*「子育てするアーティストを排除しないために：文化施設やレジデンスのためのガイドライン」

<http://www.artist-parents.com/ja/>

■ 担当学芸員によるギャラリートัวร์

少人数にむけて、本展担当学芸員がツアー形式で展覧会を解説します。

日時：2月23日（木・祝）、4月16日（日）、30日（日）各日14:00～（約40分）

定員：各回5名程度（要申込・先着順）

会場：現代美術ギャラリー

■ ウィークエンド・ギャラリートーク

市民ボランティアCACギャラリートーカーと一緒に展覧会を鑑賞します。（申込不要）

日時：3月4日（土）より毎週土曜日15:30～（約40分） ※但し、予告なく中止となる場合がございます。

会場：現代美術ギャラリー

■ 高校生ウィーク2022

期間：3月3日（金）～4月16日（日）

会場：現代美術ギャラリー ワークショップ室

高校生^{*1}のための展覧会無料招待企画として1993年にはじまった「高校生ウィーク」。展覧会と連動したワークショップや部活動など、さまざまなプログラムが行われる「カフェ」^{*2}をギャラリー内に設置し、その運営も若い世代が担ってきました。現在は対象を多世代にひらき、多様な人や価値観に出会う機会を提供します。下記プログラムをはじめ、期間中ギャラリーワークショップ室内に出現する「カフェ」で、ワークショップや読書、裁縫などさまざまなプログラムをどなたでも楽しめます。

※1：高校生および同年代を含む ※2：飲食物の提供はございません



連続座談会 powered by いいあんぱいレストラン

ゲストを招き、ケアに関する気になるトピックについて話す連続座談会を行います。

会場では、水戸市内で認知症の方が主人公となり、一人ひとりの個性や可能性を活かした接客やおもてなしを行う「いいあんぱいレストラン」と協働し、認知症の方々とスタッフが一緒に来場者が過ごしやすい場を作ります。※飲食物の提供はございません

日時：①3月5日（日）、②3月19日（日）、③3月26日（日）ほか 各日13:30～15:30

①子どもとかかわる市民性とまちづくり（小澤いぶき [NPO法人PIECES代表]）

②動作と仕事（川崎智子 [と整体主催/整体指導者]）

③「着たい服」を選ぼう！相談会（前田哲平 [キヤスク/コワードロブ代表]）

料金：各回1,500円/年間パス会員、高校生以下・70歳以上、障害者手帳をお持ちの方は500円

定員：各回15名程度（要申込、先着順）

部活動（随時募集・随時活動）

ほんでたいわ部 3月12日（日）、4月8日（土）ほか



部活動「ほんでたいわ部」活動の様子

柵瀬茉莉子「ぬいぬいワークショップ」

「縫う」という行為と植物や人の中にある時間を作品にしてきた柵瀬茉莉子と一緒に、大切な人と過ごす「今」を縫いながら記録するワークショップです。大切な人を胸におひとりでも、赤ちゃんや小さなお子さんも含め大切な人と一緒でもご参加いただけます。

日時：3月21日（火・祝）10:30～12:00/14:00～15:30

料金：2,000円（キット代金込）

定員：各回15名程度（要申込、申込多数の場合は抽選）

会場：会議場



2019年「ぬいぬいワークショップ 子どもの成長を記憶する作品づくり」の様子

Ph.D.（フード）ワークショップ「時をかさねるクッション」

イスや家具のリペアを通して、自分の手と工夫で作り事の楽しさを教えてくれるPh.D.（フード）。今回は、靴下工場の美しい残糸、みなさんの好きな品々や古着を詰めて、思い出アルバムのようなすてきなクッションを作ります。

日時：5月4日（木・祝）10:00～12:30/14:30～17:00

料金：高校生以下1,000円、一般2,500円

定員：各回10名程度（要申込、申込多数の場合は抽選）

対象：小学1年生以上 ※小学生は保護者もご参加ください。



「時を重ねるクッション」イメージ

【展覧会に行ってみよう！】

- 「ケアする人」を考えるメッセージ&ハーブの香りのお土産。ワークショップも開催
展覧会を通して考えたこと・感じたことを、身のまわりの「ケアする人」と話してみませんか？「ケアする人」へのお土産として、リラックスや鎮静に効果のあるハーブを使ったサシェ（香り袋）とメッセージカードをお渡しします（数量限定）。
サシェには、子どものひどい肌荒れをきっかけに天然成分にこだわったスキンケア製品を販売する茨城県の企業、鈴木ハーブ研究所のガーデン～Herbal Sunny Garden～のハーブを使います。会期中にサシェづくりのワークショップも開催。開催日・配布日は当館ウェブサイトをご覧ください。
ハーブ提供：鈴木ハーブ研究所、サシェ制作協力：茨城県立水戸飯富特別支援学校

- 鑑賞ガイド

本展プレ企画として2022年7月から月1回開催してきたほんでたいわ部「Art×Book×Care読書会」の継続参加者有志がつづる、展覧会を観るヒントが詰まった鑑賞ガイド。3月下旬以降会場でも無料配布します。

- 赤ちゃんと一緒に美術館散歩

保育士資格をもつメンバーをはじめ、小さなお子さんの案内経験豊かなスタッフと展覧会を鑑賞する未就学児と保護者のための鑑賞プログラム。
日時：4月21日（金）、5月3日（水・祝）各日10:30～12:00
定員：各回5組程度（要申込・先着順）



- First Friday

3月3日（金）、4月7日（金）、5月5日（金・祝）
現代美術センターの「ファーストフライデー」！
学生と65～69歳の方が100円で展覧会をご鑑賞いただけます。※要証明書



【同時開催】

- 造形実験室

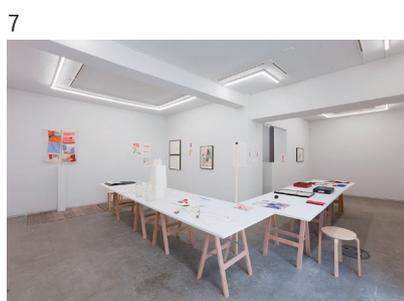
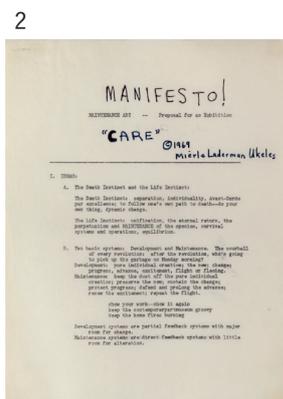
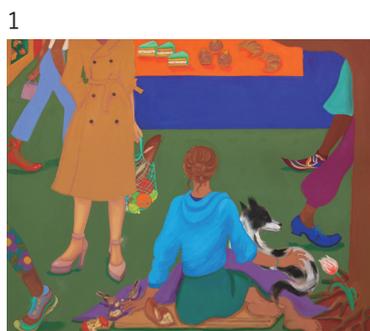
さまざまな素材や技法で造形をたのしむ月一恒例プログラム。
参加費無料・予約不要・どなたでも、ご参加いただけます。
より楽しんでいただけるように、現在、パワーアップ計画中。
2月以降の日程・会場等詳細は当館ウェブサイトにてご確認ください。



- 『目の見えない白鳥さんとアートを見にいく』読後会

当館で長年実施している「視覚に障害がある人との鑑賞ツアー session!」のナビゲーター・白鳥建二さんとの鑑賞体験をつづったノンフィクション『目の見えない白鳥さんとアートを見にいく』（川内有緒著／集英社インターナショナル2021）を読んだ人たちが集まり、それぞれの「読後」の話と共に話す場です。
日時：3月25日（土）14:00～16:00
ナビゲーター：青山ゆみこ（文筆・編集）
ゲスト：川内有緒（作家）、白鳥建二（全盲の美術鑑賞者）
料金：1,500円／年間パス会員、高校生以下・70歳以上、障害者手帳をお持ちの方は500円
定員：15名程度（要申込、先着順）
会場：現代美術ギャラリー ワークショップ室

【図 版】 展覧会広報用にデータを貸し出しますので、ご要望の方は鳥居までお問合せください。



1. マリア・ファアラ 《鳥にえさをやる女》2021年、個人蔵 Courtesy of Ota Fine Arts
2. ミエレル・レーダーマン・ユケレス 《メンテナンスアートのためのマニフェスト、1969!》1969年
Courtesy of the artist and Ronald Feldman Gallery, New York
3. マーサ・ロスラー 《キッチンの記事論》1975年 Courtesy of Martha Rosler and Electronic Arts Intermix(EAI), New York
4. 二藤建人 《誰かの重さを踏みしめる》2016-2021年 Courtesy of LEESAYA
5. ホン・ヨンイン 《アンスプリッティング》2019年
6. 本間メイ 《Bodies in Overlooked Pain (見過ごされた痛みにある体)》2020年
7. 青木陵子 展示風景：「三者面談で忘れてるNOTEBOOK」2018年、Take Ninagawa、東京 撮影：岡野圭
8. 出光真子 《たわむれときまぐれと》1984年
9. AHA! [Archives for Human Activities / 人類の営みのためのアーカイブ] 展示風景：「わたしは思い出す
10年間の育児日記を再読して」2022年、デザイン・クリエイティブセンター神戸 (KIITO)、兵庫

10



11



12



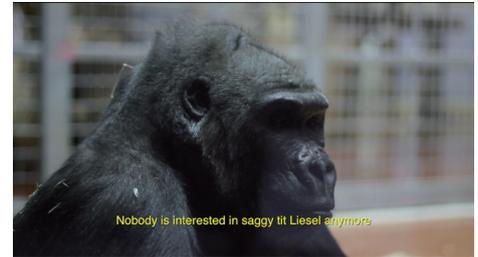
13



14



15



10. 碓井ゆい 《要求と抵抗》 2019年、愛知県美術館蔵

11. ヨアンナ・ライコフスカ 《バシャ》 2009年

12. 尹錫男 (ユン・ソクナム) 《Lotus》 2002年、栃木県立美術館蔵 撮影：上野則宏

13. 石内 都 《幼き衣へ #2》 2013年 Courtesy of Third Gallery Aya

14. ラグナール・キャルトンソン 《私と私の母》 2010年
Courtesy of the artist and Luhring Augustine, New York, and i8 Gallery, Reykjavik

15. リーゼル・ブリッシュ 《ゴリラ・ミルク》 2020年

※1、2、3、7、8、10、11、12、13の画像につきましては、掲載前に著作権者確認が必要となります。

プレス向け内覧会のお知らせ

2023年2月17日(金) 14:00～15:30 受付開始 13:30

場所：水戸芸術館現代美術ギャラリー

出席者：出品作家

後藤桜子（水戸芸術館現代美術センター学芸員）

【お問合せ】

水戸芸術館現代美術センター

〒310-0063 茨城県水戸市五軒町1-6-8 Tel.029-227-8120/Fax.029-227-8130 <https://www.arttowermito.or.jp/>

展覧会について：後藤桜子（学芸員）

教育プログラムについて：森山純子、中川佳洋（教育プログラムコーディネーター）

広報・写真貸出について：鳥居加織（広報） e-mail:cacpr@arttowermito.or.jp

* 詳細は公式ツイッター http://twitter.com/MITOGEI_Gallery でも配信いたします。

【記事掲載についてのお願い】

- 1) 掲載にあたっては、正式展覧会名称と会期の表記をおこなってください。
- 2) 写真を掲載する場合は、写真に添付してあるキャプション・クレジット等を正確に表記してください。
- 3) 誌面掲載する電話番号は、水戸芸術館代表番号029-227-8111でお願いいたします。
- 4) 掲載記事とVTRは、資料として保管いたしますので水戸芸術館現代美術センター鳥居までご送付ください。
- 5) 取材及び収録等の取材は、必ず事前にお問い合わせください。都合により取材に応じることができない場合がございます。

【交通のご案内】

[JR] 東京駅(品川、上野発もあり)から常磐線特急で約72分～84分、水戸駅下車。駅北口バスターミナル4～7番のりばから「泉町一丁目」下車。降車後、駅方向に戻り、すぐの交差点で大通り(国道50号)を渡り、そのまま真直ぐにお進みください。徒歩2分。
◎料金:特急 片道3,890円 / 普通各停 片道2,310円(2022年12月現在)
※ご予約・時刻表など詳しくはこちらをご参照ください。JR 東日本旅客鉄道 Tel.029-221-2836
<http://www.jreast.co.jp/>

[高速バス] 東京駅八重洲南口バスターミナルのりばから高速バス「みと号」(赤塚又は茨大ルート)で約100分、「泉町一丁目」下車、徒歩2分。切符は東京駅八重洲南口バス券売機、水戸駅北口バスチケット売場でお求めください。
◎料金:東京駅一水戸駅 片道切符2,250円(2023年1月改定)。※お得な割引チケットあり。
※詳しくはこちらをご参照ください。茨城交通 Tel.029-251-2331 <http://www.ibako.co.jp/>

[お車] 常磐自動車道水戸ICから国道50号に下りて市街地方面にお進みください。約20分、国道349号との交差点「南町3丁目」(左手にみずほ銀行)で左折、2つ目の信号でまた左折してください。そこから1つ目の信号を過ぎたところで水戸芸術館地下の市営五軒町駐車場のマークが見えます。
◎駐車場料金:30分まで無料、1時間まで200円、以降30分毎100円 / 営業時間:7:00～23:00
※高速料金・ルートなど詳しくはこちらをご参照ください。
東日本高速道路「ドラぷら」 Tel.0570-024-024 <http://www.driveplaza.com/>